

態度的対象の存在論と志向性 ——フッサールと現代形而上学の交差点——¹

早坂真一²

序論

人間は言語を使用することによって、他者に自分の考えを伝えることができる。例えば、渡邊が「私は火星人がいると信じている」と林に伝え、それに対して林は「火星なんているのかな?」と答えたとする。このとき、会話の内容に対する渡邊と林の心的な態度は異なるにもかかわらず、「火星人がいる」という同じ会話の内容が共有されている。このように異なる人間によって共有可能で、理解可能な会話内容の意味は「命題 proposition」と名づけられ、特に分析哲学ではフレーゲ以降、その存在についての形而上学的議論が多く哲学者によって行われてきた。そして一般的に、命題はその存在が特定の人間の心や特定の言語に依存しないという意味で、「心的独立性 mind-independence」と「言語的独立性 language-independence」を持つ抽象的存在者であるとみなされている。また抽象的存在者としての命題には、叙述文の意味や真理値の担い手、あるいは命題的態度の対象などといった複数の役割が与えられている。そのため命題は、単なる語の持つ意味とは区別されて、特別な哲学的関心のもとで研究されてきた³。

ところが近年になり、抽象的存在者としての命題はその役割をそれ自体として持

1. 本稿は平成26年3月に東海大学・高輪キャンパスで開かれた第12回フッサール研究会のシンポジウム『フッサールと現代形而上学』での提題発表を大幅に加筆・修正したものである。同発表において有益なコメントをしてくれた柏端氏、また質問をしていただいた方々に感謝する。原稿の執筆に際して、フッサールについては主に植村玄輝氏、モルトマンについては藤川直也氏から多くの貴重なアドバイスを頂いた。それらの全てを本文中で指摘することはできないが、ここに記して感謝申し上げる。

2. 神戸大学人文学研究科博士後期課程

3. 以後、本稿では原子命題を対象として議論を行っているものとする。命題に関する問題領域には複数のトピックが含まれているが、それらの概観については、Hanks(2009)が参考となる。

っているわけではなく、従来の命題に関する理論は誤りであると批判されるようになってきた。批判者達に共通しているのは、これまで命題に内在的なものであるとみなされてきた役割のいくつかが、我々の志向的作用によって外在的に付与されるものであると考える点である。しかし、志向性に訴えたことによって従来の理論に関する全ての不備を補完できたわけではないし、逆に志向性を引き合いに出したことによって別の問題が生じてしまった。そのため、志向性について多くの議論を残したブレントラーノ学派を参照することによって問題を解決しようとする論者も出てきた。例えば、命題の存在が志向性と同一視されてしまうという問題に対して、モルトマンはトワルドフスキーによる「働き Funktion」と「形成物 Gebild」の区別に依拠しながら、心的作用とその形成物である態度的対象(「S という太郎の信念」「S という花子の願望」)を存在論的に区別するという解決策を出している⁴。しかし本論で詳しく検討するように、モルトマンは異なる主体間における態度的対象の共有可能性を示さなければならないという別の問題に巻き込まれてしまっている。というのも異なる主体にとって同一である命題と異なり、態度的対象はそれを形成した主体ごとに個別化される具体的存在者で、一見したところ共有不可能だからである。

このように抽象的存在者としての命題が持つと考えられてきた役割を、態度的対象という具体的存在者に帰属させるというモルトマンの目論見は、彼女が掲げる「記述的形而上学」というより大きなプロジェクトの一環として捉えられる⁵。モルトマンによれば、自然言語は、性質や種、命題、数などの抽象的存在者を指示する多くの語を含んでいると考えられてきたが、近年の言語学の成果を踏まえれば、それらの語のほとんどは具体的存在者あるいは個別者を指示していると解釈し直されなければならない。代表的な例で言えば、これまで「赤」という語は抽象的な性質を指示すると考えられてきたが、現代的形而上学では「赤」はトロープという個別化された性質を指示していると解釈できることが常識になっている。このように、抽象的存在者を用いた分析が当たり前になってしまっている自然言語の存在論や意味論に対して批判を加え、自然言語により適した存在論を提供するのがモルトマンの「記述的形而上学」というプロジェクトなのである⁶。

4. 命題的な性質を持つと想定される存在者は命題的对象と総称され、現在、多種多様な命題的对象の存在論が互いに競合している状況である。しかし、いくつもある命題的对象の存在論のうち、どれが最も良い理論であるかを決定する基準については、全ての論者が明確に述べているわけではなく、モルトマンのように自然言語の意味論に対して説得力のある議論を提示できることを暗黙の基準にしているように思われる。

5. Cf. Moltmann (2013), pp. 1-3.

6. シンポジウムで発表したとき、まだ筆者はモルトマンの哲学的意図をよく理解しておらず、柏端氏と植村氏から、モルトマンの議論は哲学というよりは自然言語の意味論に動機づけられているのではないかと指摘していただいた。また柏端氏からは、モルトマンの議論の出発点は「命題」という哲学者語の問題ではないかとも指摘していただいた。本文で見たように、モルトマンは命題という哲学者語についての議論を出発点としているが、彼女の目的は自然言

さて、モルトマンは以上のような動機のもとで態度的対象について論じているのだが、彼女の理論的枠組みとそれが抱えている問題は、『論理学研究』(以下『論研』)⁷の時期のフッサールに非常に近い。ただし両者では議論の目的が異なっている。というのも、フッサールは、論理法則を心理学的な経験的法則とみなそうとする論理的心理学を批判し、論理法則が数学と同等の純粋な理論的法則であることを擁護するために、論理学の対象としての命題の存在を認めるための議論を行わなければならないからである。私見では、モルトマンの態度的対象に生じる共有可能性の問題は、論理的心理学批判の文脈で生じた命題についての議論に起因しているように思われる。そこで、本稿ではモルトマンとフッサールの置かれている理論的文脈の相違に着目し、態度的対象に生じる問題のうち、どこまでが自然言語の存在論の問題で、どこからが論理的心理学批判にまつわる問題なのかを正確に捉え、それらの問題を解決するための見通しを与えたい。これによって、フッサールや彼の同時代の議論を詳細に考察することが、現代形而上学を異なった観点から捉え直すきっかけになりうることを示されるだろう⁸。

以下、本文では次のように議論を進めていく。まずは、1. モルトマンが従来の命題に関する議論のどこに問題を見出し、志向性概念を必要とするようになったのかを概観する。次いで、2. トワルドフスキーの作用と形成物の区別に依拠した態度的対象の存在論的な位置づけとその問題点を明らかにする。そして、3. フッサールにとって命題の同一性は、主体間の会話内容の共有可能性を示すためではなく、論理学における心理学への批判という特殊な文脈において必要とされたということを示す。最後に、4. フッサールとモルトマンの議論を踏まえて、一般的に言って命題的对象の共有可能性ということで、(i) 「タイプとして同一の命題的对象が異なった主体の信念として例化されうること」と、(ii) 「主体間での命題的对象の伝達可能性」が議論の理論的目的に沿って区別されなければならないことを論じる。

語の存在論を提供することにある。

7. 慣例に従って、フッサール全集の巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で表す。特に断りがない限り本稿で引用・参照される『論研』とは第一版である。

8. モルトマンは、単に自然言語の存在論を提供することだけを目的としており、自然言語は「何が本当に存在しているのか」という存在論的問いについての基準になりうるのか、という議論には立ち入らないと述べている (Moltmann (2013), p. 4.)。しかし、モルトマンだけでなく現代の形而上学者の多くはメタ形而上学的な議論を避けることによって、結局は彼ら自身の自然言語に対する直観的な「自然さ」のある特定の存在者を認めるための最終的な暗黙の審級としてしまい、それが原因となって哲学的混乱が引き起こされているように思われる。日常言語と形而上学的術語の関係、それらの使用の「自然さ」についてのメタ形而上学的批判に関しては Hofweber (2008) を参照せよ。本稿は哲学的反省からの、ある種のメタ形而上学的議論として捉えられるだろう。

1. 現代形而上学における「命題」

1.1 命題的態度の関係説

すでに序論でも触れたように、命題は様々な役割を果たす存在者と考えられているが、モルトマンが最も集中して議論しているのは、命題的態度の分析である。というのも、「信じる」や「主張する」のような命題的態度は主体と命題の関係として分析されるのだが、このような分析そのものが命題を抽象的存在者として認める形而上学的議論を動機づけているからである⁹。つまり、抽象的存在者としての命題を認める形而上学的議論と命題的態度の分析は互いに蜜月関係にあるのである。そのため、モルトマンは命題的態度の分析にとって命題という抽象的存在者が使えない場合もあることを示すことによって命題に関する既存の形而上学的議論に反論を加え、命題の存在論的代替物として態度的対象という存在者を導入するのである。少し遠回りになってしまうが、命題的態度の分析を先に見たほうがモルトマンの哲学的立場を理解しやすくなるため、命題に関する最近の議論の紹介も兼ねて始めにこちらを詳しく論じていこう。

まずは、次の二つの文を見てみよう。

- (a) John likes Mary.
- (b) Russell believed that Mathematics reduces to Logic.

以下では、混乱を避けるために語とその語によって指示される「命題的構成要素 propositional constituent」¹⁰を区別し、例えば、‘John’という語によって指示される個体を John*とし、‘likes’によって指示される関係を likes*と表記する¹¹。

(a) から見ていこう。これは以下のように John*と Mary*という個体の間に likes*という二項関係が成り立っているものと分析できる。

- (a*) likes*(John*, Mary*)

では (b) はどのように分析されるのだろうか。まずは、以下のように (b) の that 節が ‘the proposition that...’ という表現によって真理値も意味も変えることなく置換できるという事実に着目しよう。

9. Cf. Moltman (2014), p. 681.

10. 一般に命題を存在者として認めるか否かにかかわらず、命題を構成していると考えられているものが命題的構成要素と呼ばれている。命題的構成要素を語の指示対象とみなす場合は命題のラッセル主義と呼ばれ、語の意義とみなす場合は命題のフレーゲ主義と呼ばれる。命題的構成要素の存在論的身分に関しては、大抵の論者は素朴にラッセル主義をとっている。他方、モルトマンはラッセル主義とフレーゲ主義の両方を認めているが、彼女が批判の対象としている論者の多くはラッセル主義に立っているので、本論でもその仮定の下で話を進めていく。

11. また、ここでは説明を簡潔にするために時制の違いは問題としないことにする。

(b') Russell believed the proposition that Mathematics reduces to Logic.

この文では、Russell* が信じているのは ‘the proposition that...’ という表現で指示される命題であるとみなすのが自然であると考えられている¹²。そのため、(b') は次のように分析されることになる。

(b'*) believed*(Russell*, [the proposition that Mathematics reduces to Logic]*)

そして、(b) と (b') は同義であると考えられているため、(b) は (b') と同様に次のように分析されなければならない。

(b*) believed*(Russell*, [that Mathematics reduces to Logic]*)

つまり、that 節は ‘the proposition that...’ という表現と同様に命題を指示する単称名辞であるとみなされるのである。このように that 説は命題という抽象的存在者を指示する単称名辞であるという仮定 STA (Singular term assumption)¹³と呼ぼう。すると (a) が個体どうしの二項関係であったのと同様に、STA を認めると (b) と (b') は個体と命題の二項関係として分析されるのである。これは命題的態度の「関係説 RA (Relational Analysis)」と呼ばれる最も一般的な命題的態度の分析である。この関係説は、命題という抽象的存在者が存在することと STA の二つを認めることによって命題的態度を単純かつ分かりやすく説明してくれる。そして逆に、このような命題的態度への説明力のゆえに命題という存在者を認めることは形而上学的に合理的であるとみなされるのである。

1.1.1. 置換問題

以上のように一見したところ魅力的な関係説であるが、モルトマンはこれには主に二つの問題が生じると考える¹⁴。一つ目は「置換問題」と呼ばれている。通常、文の中に現れる表現(明けの明星)はその表現と同じものを指示している別の表現(宵の明星)によって、文全体の真理値を変えずに置き換えることができると考えられている。しかし、そのような置換が不可能な場合があり、これが置換問題と呼ばれるのである。例えば、次の文を見てみよう。

12. 序論でも少し触れたように誰にとつての「自然さ」かということが問われなければならないが、ここでは命題の形而上学にコミットしている英語圏の哲学者にとつて「自然」であるとしておく。

13. Cf. Rosefeldt (2008), pp. 302–3. ただし、ローゼフェルト自身は that 節が意味論的値として命題を持つことには賛成するが、それが単称名辞であることには反対している。

14. モルトマンは命題的態度の分析が説明しなければならない問題を四つ挙げているが、抽象的存在者としての命題の措定を動機づけている議論を批判するという彼女の目的にとつて重要なのは、本論で扱っている置換問題と対象化効果である。Cf. Moltmann (2003b), p. 94.

- (c) George fears that it might rain.
 (c') George fears the proposition that it might rain.

もし関係説が正しいならば、(c) の that 節と (c') の ‘the proposition that...’ という表現は同じ命題という抽象的存在者を指示しているのだから二つの文の真理値は同じはずであり、それゆえ真理条件も同じはずである。しかし、(c) と (c') では真理条件が異なってしまっている。仮に George が哲学や論理学を学んだことがなく命題という名前さえ聞いたことがないとすると、知りもしない存在者を恐れようもないので (c') は偽になってしまう。しかし、たとえ George が命題の存在を知らないとしても彼は「雨が降るかもしれないこと」を恐れることができ、その場合に (c) は真となりうる。つまり (c) を (c') にすると真理条件が変わってしまい置換問題が生じるのである。

こうした問題に対しては、that 節はそれを補語にとっている態度動詞に応じて、命題だけでなく、可能性や事態などといった命題と類似した構造を持った命題的对象を指示している、と関係説を修正することもできる (Modified Relational Analysis)。例えば、上の ‘fear’ の例では「雨が降るかもしれない」という可能性が対象となっていると解釈されるだろう。しかし、この場合、that 節は、態度動詞の種類によってどんな命題的对象を指示するのかが変わるので、指示の一意性を失ってしまい、STA に反してしまう¹⁵。

もう一つの置換問題は真理値とは関係がないがより致命的である。それはそもそもほとんどの態度動詞では、that 節を ‘the proposition that...’ という命題を指示している表現や、可能性や事実などの命題的对象を指示する表現で置換することが不可能である、という言語学的事実である。例えば、次のような例文を見てみよう。

- (d) John knows that snow is white.
 (d') John knows the proposition that snow is white.
 (d'') John knows the fact that snow is white.

(d) から (d')、(d'') への移行は不可能であるが、これは先ほどのように真理条件が変わってしまうからではなく、単に (d') と (d'') が意味論的に許容できないからである¹⁶。一つの可能性として、‘know’ のような動詞は補語として名詞句を受け付けないと、文法的に説明することも考えられるが、これは不可能である。なぜなら、‘know’ の後ろに来る that 節を ‘something’ という代名詞で置換することは文法的に可能だからである¹⁷。したがって、置換問題は意味論的な問題とみなされなければならない。

15. Cf. Moltmann (2003b), p. 84.

16. Cf. Moltmann (2003b), p. 85.

17. このように that 節が ‘something’ や ‘everything’ などの代名詞によって置換できるとい

さらには、‘remark’ や ‘complain’ のような、that 節のみを補語としてとり、その他のいかなる名詞句も補語としてはとらない態度動詞も存在する¹⁸。STA を動機づけていたのは、that 節が ‘the proposition that...’ という表現で置換することができるという言語的事実であった。しかし、以上で見てきた批判から、STA が ‘believed’ のような置換問題の生じない一部の態度動詞の場合にしか成り立たないことは明らかである¹⁹。したがって、STA は一般的に妥当するものではなく、これに基づいている関係説も非常に限られた命題的態度しか説明できない理論だということになる。

1.1.2. 対象化効果

関係説に生じるもうひとつの問題は、態度動詞は補語として that 節をとった場合と名詞句をとった場合では、それぞれ意味論的に異なった読み方をしなければならないという言語現象を説明できないことである。‘the proposition that...’ という表現も名詞句であるために、この問題に巻き込まれることになる。まずは、この問題について理解するために、次のような文を見てみよう。

(e) John expects that Mary will win.

(f) John expects Mary.

(e) でジョンが期待しているのは、「マリーが勝つこと」である。一方、(f) ではジョンの期待はマリーという対象に向けられている。つまり、(e) の that 節は「マリーが勝つこと」という期待の内容を意味論的値として特定しているのに対して、(f) では ‘Mary’ という名詞句は期待の対象である Mary* を特定していると考えられるのである。より一般的に言うと、態度動詞の補語としての that 節の意味論的値は、それが記述している命題的態度の内容であり、態度動詞の補語に現れる名詞句の意味論的値は、「態度が向けられているところの対象 the object the attitude is directed toward」なのである²⁰。そして、‘the proposition that...’ という名詞句も (e) と同様に意味論的値として対象を、すなわち命題を特定していると考えられる。

う言語現象は、一般的に非名辞的量化と呼ばれ近年注目されているが、本発表の趣旨から離れてしまうため扱わない。Cf. Moltmann (2003b). Rayo and Yablo (2001)

18. Cf. Moltmann (2013), p. 127.

19. これまでのモルトマンの議論を踏まえううえで、King (2002) や Rosefeldt (2008) は関係説を擁護している。例えば、キングは、‘believe’ や ‘doubt’、‘prove’、‘assert’ などのように that 節が命題を指示していると考えられる動詞と、‘remember’ や ‘fear’、‘desire’、‘imagine’ などのように置換問題が生じる動詞を区別し、前者のみを本来の意味での命題的態度として認めている (King (2002), pp. 357–360.)。しかし、彼らの理論では文法的に置換不可能な場合など、多く事例がはじめから考察から除外されていて、関係説で説明できる命題的態度はごく少数に限られてしまい、理論としての魅力が弱まっている。

20. Cf. Moltmann (2003b), p. 87.

(e') John expects the proposition that Mary will win.

つまり、この (e') でジョンが期待しているのは「マリーが勝つこと」という内容ではなく、命題という抽象的対象であると解釈される。このように *that* 節を ‘the proposition that...’ という名詞句で置換した際に意味論的値が内容から対象に移行する現象が「対象化効果 *objectivization effect*」と呼ばれる²¹。関係説では、*that* 節は ‘the proposition that...’ という名詞句と同様に命題を指示する単称名辞とみなされているので、この対象化効果を説明することができない。これが、モルトマンが関係説を退ける第二の理由である。ところで、前節で見たように、以下の (b) から (b') への移行では置換問題が生じないので、(b) では STA も関係説も成り立つように思われた。

(b) Russell believed that Mathematics reduces to Logic.

(b') Russell believed the proposition that Mathematics reduces to Logic.

しかし、以上で見てきたように態度動詞の補語に現れる *that* 節は、命題でなく、命題的態度の内容を特定しているものと考えられた。したがって、この例文もモルトマンにとっては STA と関係説を擁護するものではない。モルトマンにとっては、命題的態度に関する分析は、置換問題と対象化効果の両方を同時に説明できるものではないので、それができない関係説は命題的態度の分析として適切ではないのである。ただし (b') では STA と関係説が成り立っていることにモルトマンは同意している。つまりモルトマンにとって関係説とは、‘believed’ のような態度動詞に対象化効果が生じた場合にのみ成り立つ、二次的で派生的な命題的態度を説明したものに過ぎないのである²²。

ところで、モルトマンの命題的態度の内容とは正確に言って一体何なのだろうか。これを理解することによって、なぜモルトマンが命題的態度の分析に態度的対象という概念を持ち込むことになったのかが分かりやすくなるので少しだけ触れておこう。モルトマンによれば、*that* 節が命題的態度の内容を特定しているということは、命題的態度の標的が命題的構成要素としての個体と性質の結合あるいは関係である、ということの意味している。したがって、命題的態度とは、単なる個体と命題の二項関係ではなく、「対象へ性質を述定づける仕方 *ways of predicating properties of objects*」をも含むより複雑な関係であると考えられる²³。さらにモルトマンはこの考えをより進めて、命題的態度を主体による志向的な述定の作用とみなす²⁴。だが、この解釈に

21. 対象化効果も置換問題と同様に単なる文法上の問題としては片付けられない。なぜなら、*that* 節を ‘something’ や ‘everything’ などの代名詞によって置換した場合には、対象化効果は生じないからである。Ibid.

22. Cf. Moltmann (2003b), p. 104.

23. Ibid., p. 89.

24. Ibid., p. 106.

よると、命題的構成要素は志向的な述定の作用によって互いに結合されているので、命題が心的独立性を持っているという通常の見解と矛盾することになってしまう。そのため、心的作用に存在論的に依存した態度的対象が命題の存在論的代替物として必要になってくるのである。この点に関しては後述するので、再びモルトマンによる現代の命題概念への批判に戻ろう。

1.2 命題への批判

モルトマンの批判は、命題的態度の分析ほど詳細ではないものの、命題についての存在論的議論にも向けられるので以下で簡潔に見ていこう²⁵。命題は、命題的態度の対象という役割以外にも、真理値の担い手や叙述文の意味という役割も担うとみなされてきた。しかも、抽象的存在者としてそれらの役割を果たすものと考えられてきた。命題を抽象的存在者として特徴付けるために取られる典型的な方針は、すでに哲学において受け入れられている別の抽象的存在者に還元することである。しかし、このような命題の存在論的還元にはいくつかの問題があることが知られている。その一つは命題に関する「同定の任意性問題」である。この問題は命題を命題的構成要素から成る複合的な抽象的存在者と同一視することによって生じる問題である。例えば、‘Annie likes Carl’ という文で表される命題を、それぞれの語が指示する命題的構成要素の順序対、すなわち個体と性質の順序対と同一視しようとする、その候補が以下のように複数存在することになる²⁶。

- (g1*) <Annie*, Liking*, Carl*>
 (g2*) <Liking*, Annie*, Carl*>
 (g3*) <Liking*, <Annie*, Carl*>>

これらの命題的構成要素の順序対のうちどれを命題と同一視するかは任意である。つまり、命題を複合的な抽象的存在者に還元しようとする、いわゆる存在の一義性を保証できなくなってしまうのである²⁷。しかも、これは態度動詞の *that* 節が指示する命題の候補も複数存在することを含意しており、STA が成り立たなくなってしまう。よって、「同定の任意性問題」は命題的態度の関係説を否定することにもつながるのである。

また、このような還元的方針に関連した二つ目の問題は、そもそも単なる命題的構成要素の順序対という集合論上の存在者がなぜ真理値の担い手になりうるのか、す

25. Cf. Moltmann (2013), pp. 125–6, Moltmann (2014), pp. 682–3.

26. Cf. King (2007), p. 7.

27. これ以外にも、命題を可能世界、あるいは可能世界から真理値への関数と同一視しようとした試みがある。しかし、命題をどのような形式的対象と同一視させようとしても同様の問題が生じることが分かっている。Cf. Moore (1999), Jubien (2001).

なわち「真理指向性」をもつのかという問題である²⁸。通常、集合は真理値の担い手という役割を持っていないので、もし命題的構成要素の順序対が真理値の担い手という役割を持つならば、それは我々の解釈によって外在的に与えられるしかない、モルトマンはそう考える。

三つ目は、「命題の統一」に関する問題である。命題は特定の真理条件を持つと考えられている。したがって、命題はそのような特定の真理条件を持つものとして統一されていなければならないはずである。例えば、John* という個体と、「幸せである」という性質 H* の順序対 $\langle \text{John}^*, \text{H}^* \rangle$ が命題として与えられたとしよう。これら John* と H* の間の関係は様々に捉えることができる。「ジョンは幸せである」とも、「ジョンは幸せでない」とも取れるし、さらには「ジョンと幸せは同一でない」という関係とみなすこともできる。つまり、 $\langle \text{John}^*, \text{H}^* \rangle$ という順序対がどのような真理条件を持つものとして統一されているかは定かでないのである。モルトマンは、命題の統一も我々の解釈によって外在的に与えられるしかないと考えている²⁹。

以上で見てきたように、真理指向性や命題の統一は、単なる抽象的对象に内在する性質であるとは考え難い。次節で見るように、モルトマンは、命題的構成要素にこれらの役割がいかにして外在的に与えられるかを説明するために志向性という概念を必要とするのである。

1.3 命題的態度の多項関係説と志向性

さて、これからモルトマンがどのようにして上記の問題を志向性概念によって解決しようとしているのかを見ていこう。先に 1.1.2. で少しだけ触れたように、モルトマンは命題的態度を対象へ性質を述語付ける志向的作用と解釈した。この発想に基づいてモルトマンは、ラッセルに由来する命題的態度の「多項関係説 MRA: Multiple Relation Analysis」を提案している³⁰。多項関係説は STA を否定し、that 節を、命題的構成要素を指示する多項とみなす。例えば、先ほどの (b) は次のように分析される³¹。

28. Moltmann (2014), p.683.

29. Gaskin (2008) や King (2007) らは命題の統一を、命題に内在的なものとして説明しようとしているが、未だ十分な答えが提出されたとは言い難い。

30. ラッセル自身が多項関係説をとる動機はモルトマンの動機とは全く異なる。ラッセルが多項関係説を支持するのは、関係説をとった場合には命題的態度の対象として偽なる命題の存在も認めることになり、ひいては偽なる命題を真にする否定的 Truth-Maker の存在をも認めることになって、彼の実在論的哲学観と反してしまうからである。Cf. Russell (1906–7), pp. 45–6. Griffinn (1985), pp. 213–4.

31. セミコロンの前の項位置では、現れる項の数が態度どうしの種類によって制限されているが、セミコロンの後ろに現れる項の数に制限はない。

(b'*) believed*(Russell*; the relation of reducing*, Mathematics*, Logic*)

この分析では、believed* は主体と命題の二項関係ではなく、主語の位置に現れる主体と that 節内に現れる命題的構成要素の多項関係とみなされている。そして、モルトマンの特異な点は believed* を、Russell* という志向的主体による述定の志向的作用とみなすことである³²。この述定の志向的作用こそが「対象へ性質を述語付ける仕方」を担っており、セミコロンより右側の命題的構成要素である Mathematics* と Logic* はまさにこの順序でもって、the relation of reducing* という関係に結び付けられるのである。さらにモルトマンは多項関係説を敷衍して、態度動詞を含まない叙述文でも、それによって指示される命題的構成要素が統一されるためには志向的主体が必要であると考え。例えば、次の (h) の叙述文は (h*) のように分析される³³。

(h) Mary likes Bill

(h*) Assert*(x*; the relation of liking*, Mary*, Bill*)

つまり、叙述文も任意の志向的主体 x によって主張される命題的態度の一種とみなされるのである。

このように志向性に基づいた多項関係説をモルトマンが取る理由は、命題的態度の関係説に生じた置換問題と対象化効果、並びに命題に関する同定の任意性問題や、真理指向性の問題、命題の統一の問題を一挙に解決するためである。すでに見てきたように、多項関係説では that 節は抽象的存在者としての命題を指示する単称名辞ではなく、命題的構成要素を指示する多項であるとみなされるため、そもそも置換問題は生じないと考えられる。また、命題は一般に叙述文の意味とみなされているが、モルトマンは、叙述文を任意の主体 x の主張であると解釈することによって、命題の持つ順序構造を任意の主体 x の志向的作用によって与えられたものとして説明可能になり、これによって同定の任意性問題が回避できると考えている。加えて、命題に内在するとみなされていた真理指向性や統一性も志向的作用によって与えられたものとして解釈しなおすことができる。

以上が、命題的態度の分析と命題の存在論に志向性が導入されるようになった経緯である。いまはモルトマンの議論に焦点を当てて見てきたが、他の論者もほぼ同様の議論によって志向性の導入を動機づけている³⁴。モルトマンが考えるように志向性の導入によって命題にまつわる多種多様な問題を本当に一挙に解決できるのかどうかは慎重に検討すべき問題であるが、ここではその全てを扱うことはできない。そこで本論では彼らの動機を理解した上で、志向性概念を導入することによって生じた

32. Cf. Moltmann (2009), pp. 11–13.

33. Ibid., p. 12.

34. Cf. Jubien (2001), Soames (2010), Hanks (2011).

別の問題に焦点を当てたい。

それは、多項関係説では命題という概念が出てこないが、これまで命題が果たすと考えられてきた役割は一体どのような存在者が果たすのだろうか、という問題である。先ほどの分析では (h) は (h*) という志向的述定作用として分析されたが、仮にこれが命題の代替物となりうるとしよう。そうだとすると、不合理なことになってしまう。なぜなら志向的作用という時空間上に存在する心的出来事は、各々の主体による共有可能性や心的言語的独立性といった命題に特有の性質を持たないからである。そこで、モルトマンと同様に志向性に基づいた多項関係説を支持するソームズやハンクスは命題を表象状態や思考といった認知的行為のタイプとみなす³⁵。この解釈によって、彼らは抽象的存在者としての命題を認知的行為のタイプとして認めつつ、命題の持つ順序構造を志向的作用によって与えられたものとして説明することができるのである。しかし、次節で見るように、モルトマンは志向的作用のタイプは命題に課せられてきた役割を果たしえないと彼らの理論を批判し、態度的対象こそがふさわしいと考えるのである。

さて、だいぶ長い解説となってしまったが、ここまでがモルトマンが態度的対象を命題の代替物として提案するようになるまでの理論的背景である。彼女が多く挙げる例文からも伺えるように自然言語としての英語の分析が主眼となっているのは理解できるだろう。現代の命題の形而上学に関わる者は多かれ少なかれ、モルトマンのように自覚的でないにせよ、このように自然言語としての英語の分析に終始する傾向にある。次節では、モルトマンの態度的対象の理論を批判的に検討することによって、このような傾向性に潜む問題点を指摘したい。

2. 態度的対象

これまで見てきたように現代形而上学では、命題という抽象的存在者を使って、自然言語としての英語に対して、彼らにとって「自然な」存在論ないしは意味論を与えることを目的としている。モルトマンの批判の要点は、命題という抽象的存在者によっては自然言語に「自然な」存在論を与えることができないということである。モルトマンが命題に代わって態度的対象という概念を自らの理論に導入するとき、トワルドフスキーの働きと形成物の区別を受け入れるのも、自然言語に「自然な」存在論を与えるというこの目的の延長線上にある。しかし、トワルドフスキーがそれらの概念を区別したそもそもの目的は別のところにあったため、モルトマンの議論には齟齬が生じてしまっている。さらにトワルドフスキー自身も、働きと形成物の区別に

³⁵ Cf. Soames (2010), p. 101. Hanks (2011), pp. 12–3.

ついて論じる際に、フッサールの命題に関する理論を誤解した形で受け入れているため、二重に混乱が生じてしまっている。もちろん異なった目的のもとに作られた概念を別の目的のために用いたからといって必ず問題が生じるわけではないだろう。しかし、態度的対象の議論に生じる問題は、以降で見ていくように文脈のズレが原因となっている。フッサールの議論は次節に譲るとして、まずこの節では、モルトマンがどのようにトワルドフスキーの概念を受け入れているのかを確認していこう。

モルトマンが認知的作用のタイプを命題と同一視するのを批判するのは、私たちが正しいとか間違っているなどと言うのは、「主張されたこと」についてであり、主張するという行為それ自体についてはないという直観からである³⁶。そこでモルトマンは「太郎の S という信念」や「花子の S という願望」といった名詞句で表される対象を「態度的対象」と呼び、これこそが命題に課されてきた役割、すなわち叙述文の意味や真理値の担い手などの役割を果たすと考える。この態度的対象の存在論的身分を説明するために用いられるのが、フッサールの兄弟子に当たるトワルドフスキーの「働き Funktion」と「形成物 Gebild」の区別である。前者の働きは行為(Tätigkeit)と出来事 (Vorgang) を包括する概念である。働きと形成物の違いは動詞とその名詞化の言語的な区別によって理解できる。例えば、「判断すること」と「判断」、「思考すること」と「思想」、「走ること」と「疾駆」、「歌うこと」と「歌」などでは、前者が働きで後者が形成物である³⁷。この区別に従うと、前節で見た

(h*) Assert*(x*; the relation of liking*, Mary*, Bill*)

とは働きとしての主張行為であり、これによって生み出された形成物が、一種のトロープである態度的対象である³⁸。モルトマンはこの形成物としての態度的対象こそがこれまで命題が果たすと考えられてきた役割を果たすと考える。この区別は一見分かりやすそうだが根本的な問題が含まれている。それは、主体間における態度的対象の共有可能性の問題である。トワルドフスキーとモルトマンがともに合意するには、心的形成物とは心的作用が生じている間だけ存在するものである³⁹。つまり態度的対象は特定の時空間上に存在する対象である。しかし、態度的対象は命題の代替物とみなされていることを考慮すると、命題と同様にいつどこで誰にとっても同一の意味という役割を果たさなければならないはずである。つまり、態度的対象は特定の時空間上にのみ存在するにもかかわらず、それが生じるたびに同一であるというパラド

36. Cf. Moltmann (2014), p. 7.

37. Cf. Twardowski (1996), p. 157.

38. Moltmann(2013)では、態度的対象は単にトロープとして特徴づけられていた。しかし、心的作用もトロープであり、態度的対象との区別がつけにくいいため、働きと形成物の存在論的区別が導入されることになった。

39. Cf. Twardowski (1996), p. 169. Moltmann (2009), p. 17. Moltmann (2014), p. 19.

キンカルな状況を説明できなければならないのである。

モルトマン自身は直接トワルドフスキーに言及しているわけではないのだが、彼のこの問題への解答の仕方は、モルトマンの理論を考える上で参考になるので見ておこう。それは、心的作用と心的形成物に加えてさらに各々の心的形成物の「共通の要素 *das gemeinsame Element*」という三つ目の存在者を認めるという解決法である⁴⁰。例えば、話者の信念作用によって生み出された心的形成物としての信念は、この共通の要素によって聞き手と共有可能になるのである。だが、このように第三の存在者を認めることによって心的形成物の共有可能性を説明するという方針は、以下で言及するようにフッサールの着想を不用意に借用した結果であるため、その妥当性については慎重に検討する必要がある⁴¹。

他方、モルトマンは態度的対象の共有可能性の問題に対して二つの解決案を提示している。一つ目は、態度的対象の同等性に訴えることによってである。ただし、この同等性は数的な同一性とみなされてはならない。態度的対象は志向的主体に生起する特殊なトロープであるため、ここでの同等性とは、質的な類似性とみなされる⁴²。つまり、態度的対象は互いに質的に類似していることによって共有可能になるのである⁴³。しかし、モルトマンはこの方針よりも第二の方針の方を優先して議論を行っている。それは、トワルドフスキーと同様の方針で、態度的対象の「種 *kind*」が異なる志向的主体によって共有されているという答えである⁴⁴。態度的対象の種とは、「John の」とか「太郎の」といった修飾句を脱落させた、「S という主張」や「S という願望」という名詞句によって表現されるものである⁴⁵。態度的対象が特定の志向的主体が存在する時空間上に存在するのに対し、態度的対象の種は特定の志向的主体からは独立しているとみなされる。ただし、真理の担い手などの役割を本来的に担

40. Cf. Twardowski (1996), p. 181.

41. また、トワルドフスキーが明示的に述べているわけではないが、ブランドルは彼のテキストから二つ目の方針を取り出せると述べている。それは心的形成物を共通の要素と同一視するという方針である。しかしこの場合は、異なった心的作用が生成消滅するたびに誰にとっても同一の共通要素が同時に生成消滅するのはどのようにして可能なのか、という問題が生じることになってしまうため、有望な解答ではない。Cf. Brandl (1996), p. 30.

42. Cf. Moltmann(2009), p. 14, Moltmann(2013), p. 134.

43. フッサールは対象の類似性は同一性に基づくと考えるので、このような立場には反対するだろう (XIX/1, 117)。

44. 態度的対象の種という概念は、モルトマンがトワルドフスキーを知る前の Moltmann (2003b) ですでに扱われており、トワルドフスキーに直接由来するわけではない。しかし、Moltmann (2009)では態度的対象の共有可能性の説明として、態度的対象の質的な類似性と態度的対象の種による二つの説明があったにも関わらず、Moltmann (2014) では態度的対象の種による説明しかなかったのは、トワルドフスキーの論文から強い影響を受けたためではないかと推察される。Cf. Moltmann (2009), p. 14. Moltmann (2014), p.694.

45. ちなみに、態度的対象の種についての名辞は質量名辞のように振舞うと考えられている。Cf. Moltmann (2013), p. 140.

うのは態度的対象であり、態度的対象の種はそれらの役割を態度的対象から引き継いでいるとみなされる。つまり態度的対象の種は意味の共有可能性のために特別に指定されている存在者なのである。そしてモルトマンは、抽象的存在者としての命題を、最も一般的な態度的対象の種として捉えるのである⁴⁶。おそらくモルトマンが類似性による共有の説明よりも態度的対象の種による共有の説明を優先させるのは、命題の存在も認めたいからであると推察される。なぜなら前節で見たように、モルトマンはほとんどの命題的態度が抽象的存在者としての命題によっては分析できないことを示しつつも、‘the proposition that...’ という名詞句だけは命題を指示していると認めているからである。

以上がモルトマンの態度的対象の理論であるが、モルトマンはトワルドフスキーの概念を借用するときに、根本的な点を無視している。それは、トワルドフスキーの議論が、19世紀後半から20世紀初頭における論理学の心理主義からの脱却という特殊な文脈に位置づけられているという点である。モルトマンが参照している論文の中でトワルドフスキーは、心的形成物という概念が非心理主義的論理学を作り出す過程において徐々に生じてきたと述べている⁴⁷。次節で詳しく論じるが、当時は、論理法則を心理学的な経験的法則であると解釈する論理的心理主義が主流だった。これに反対し、論理学を心理学から独立させるために必要とされたのが、心的作用としての「判断すること」と作用の内容としての「判断」の区別である。そしてこの「判断すること」と「判断」の区別を一般化したのが働きと形成物の区別である⁴⁸。そのためモルトマンが、働きと形成物の区別を「自然言語の存在論」の一部として受け取っているのはあながち間違いではない⁴⁹。しかし、トワルドフスキーの心的形成物の共通の要素に相当する態度的対象の種を自然言語の存在論の中に位置づけることには問題があるように思われる。なぜなら、トワルドフスキーは働きと形成物の区別を一般化したあとで、フッサールが論理学の客観性を示すために必要とした「イデア的意味」という概念も必要だと考えて、それに相当するものとして心的形成物の共通要素の存在を認めたからである⁵⁰。つまり、トワルドフスキーの心的形成物の共通要素とは、フッサールにしてみれば論理学の客観性を示すために必要な概念で、自然言語の説明にとっても本当に必要な概念なのかは議論の余地がある。よって、モルトマンの態度的対象の種という概念についても慎重に検討する必要があるだろう。

さらにもう一つ、モルトマンはトワルドフスキーが詳細に検討している心的形成

46. Cf. Moltmann (2003b), pp. 106–7, Moltmann (2013), p. 141.

47. Cf. Twardowski (1996), p. 163.

48. ちなみに、有名なトワルドフスキーの表象の内容と対象の区別に関連付けると、心的形成物は表象の内容に対応する。Cf. Twardowski (1996), p. 168.

49. Cf. Moltmann (2014), p. 688.

50. Cf. Twardowski (1996), p. 182.

物と心理物理的・形成物の区別にあまり注意を払っていない。トワルドフスキーによれば、判断などの心的形成物が他者と共有可能であるためには、それが言語的表現のような心理物理的・形成物にならなければならない⁵¹。当たり前のことであるが、ある特定の個人にのみ内在する判断や願望など、他人にとって知覚不可能な心的形成物は、発話や記述といった行為によって知覚可能な心理物理的・形成物にならなければ他人と共有できない。聞き手あるいは読み手は心理物理的・形成物としての言語表現を知覚することによって、書き手あるいは話者の心的形成物と類似した心的形成物を自身の心の中に再現することができる。ここで注意しなければならないのは、トワルドフスキーがこのような具体的な場面を語るときに表現の「伝達 *Mitteilung*」という機能を重視していることだ。モルトマンは主体間での態度的対象の共有可能性を示すときに、態度的対象の種の存在を重視しているが、トワルドフスキーのように具体的な場面を思い浮かべるならば、表現の伝達という機能も意味の共有可能性の条件の一つとして考慮されなければならないだろう。もちろんモルトマンも、態度的対象は心理物理的・形成物として物理的に実現した場合にのみ、他者にとって知覚可能になると考えている⁵²。それにもかかわらず、モルトマンが態度的対象の種による共有可能性を重視するのは、異なる主体が各々の信念を表明せずに、その信念を共有している場合があるからである。モルトマンは次のような例を挙げている⁵³。

(i) The belief that god exists is widespread.

「神が存在する」という信念を互いに全く面識のない人々が互いに共有していることは、疑いようのない事実である。だが、このような信念が共有可能になった経緯を遡れば、最終的には本などの心的形成物を媒介した伝達にたどり着くだろう。つまり、トワルドフスキーは心理物理的・形成物が現実に共有されるための条件を重視するのに対して、モルトマンは態度的対象が共有される可能性の条件を重視しているのである。

ここで一度まとめておこう。モルトマンは命題的態度の置換問題や命題の同定の任意性問題などを解決するために志向性を必要とした。ただし、命題に課せられてきた役割を志向的作用に直接に帰属させるのは直観に反するため、モルトマンは志向的作用によって生み出された態度的対象にそれらを帰属させるという選択をする。しかし、そうすることによって今度は主体間における態度的対象の共有可能性を説明しなければならないという問題が生じてしまい、その説明のために態度的対象の種という特殊な存在者が必要とされることになった。このようなモルトマンの議論は自然言語の存在論を与えるという動機に基づいているにも関わらず、論理学の心

51. Ibid., pp. 175–7.

52. Cf. Moltmann (2014), p. 692.

53. Ibid., p. 694.

理主義批判という全く別の文脈で必要とされたトワルドフスキーの概念を不用意に借用してしまっている。さらに、モルトマンは意味の共有可能性を問題としていながら、言語表現の伝達の機能にさほど注意を払っていない。次節以降では、フッサールの議論を参照することによってモルトマンの理論が抱える問題をより正確に捉え直し、それを解決するための見通しを与えたい。

3. フッサールの命題論

3.1 論理的心理主義批判

これまでも少し触れてきたようにフッサールが「命題 Satz」⁵⁴の存在を認める理由は論理的心理主義への批判にある。この問題に関してはすでに多くの先行研究があるので、ここでは本論に資する限りで簡略に説明したい⁵⁵。『論研』のフッサールによれば論理的心理主義とは、論理学は「その本質的理論的基礎を心理学に持つ」(XVIII, 63)と解釈する立場である。したがって、論理法則は心理学によって与えられる経験的な因果法則に還元され、論理的真理は経験的真理に還元されてしまうことになる。一方で論理学は、他の学問を理論的に体系化し基礎付けるための法則、例えば推論形式などを提供する学問でなければならないとみなされている(XVIII, 33)。ところが論理的心理主義が正しいとするならば、経験的で因果的な心理学的法則に還元された論理法則はその妥当性に関して「蓋然性」しか持たず(XVIII, 22)、諸学を基礎付けるための客観性を欠いていることになってしまう。そこでフッサールは論理学の客観性を認めるために、論理法則を非経験的でアприオリに妥当するイデア的法則と位置づけ、経験的で蓋然性しか持たないリアルな法則としての心理学的法則と対置させるのである。このように論理法則をイデア的法則として説明するときに必要とされるのが命題という概念である。人が論理的心理主義に傾いてしまう原因は、判断という語の多義性にある。そこでフッサールは心的作用としての判断と言明の意味としての判断を区別し(XIX/1, 145)、後者を命題と呼ぶ。命題は、それを思考する人物や心的作用が存在するかどうかにかかわらず同一のスペチエス、すなわち普遍者である(XIX/, 105)。そして、論理学は普遍者としての命題を対象とし、それらの間に成り立つ連言や選言といった結合形式、あるいは推論形式などのイデア的法則を扱うとみなされるのである(XVIII, 245)。

54. 主に専門語として使われることの多い日本語の「命題」や英語の‘proposition’と異なり、ドイツ語の‘Satz’は論理学や数学における命題を意味すると同時に、日常的な文脈では文を意味することもある。フッサールが‘Satz’という語を使うときは前者の命題を意味している。

55. Cf. Hannna (2008).

したがってフッサールにとって命題とは、現代のように自然言語の理解のためではなく、論理的心理主義を批判し、論理学をイデア的法則についての学として成立させるために必要とされた存在者なのである。これはフッサールだけの事情ではなく、モルトマン達が命題という概念の説明のために度々引用しているフレーゲも論理的心理主義を批判するために「思想 *Gedanke*」という概念を用いている⁵⁶。このような歴史的背景を考慮すると、モルトマンが命題的態度の分析で示したように、命題概念を自然言語の分析のために用いると、置換問題に代表されるような様々な問題が生じてしまうのは当然のように思われる。というのも、論理的心理主義という特殊な文脈で必要とされた概念を、現代の論者は自然言語の分析という全く異なる目的のために用いているからである。

3.2 命題と志向性

さて、フッサールもモルトマン達と同様に意味の理解のために志向性が必要であることを主張しているが、その理由は彼らとは根本的に異なっている。モルトマン達の理論では命題の持つ順序構造は心的作用に依存しているため、結局のところは命題が心理学化あるいは自然化されてしまうことになる。よって論理的心理主義を批判するフッサールにとっては許容できない立場である。フッサールにとって「命題は心的作用から形成されるわけではなく」、それ自体として統一を持った存在者である (XIX/1, 99)。つまりフッサールにとって志向性は命題に構造あるいは統一を与えるために必要なのではない⁵⁷。フッサールが志向性を必要とするのは、言語表現がそれ自体では意味を持たず、主観の意味志向作用によってその意味を与えられると考えるからである。論理学も言語表現の体系である以上、意味志向作用によって意味をしかもイデア的な意味統一としての命題を与えられる必要がある。だが、このように考えることによって結局フッサールはモルトマン達と同じ問題に巻き込まれることになる。すなわち、意味志向作用は我々がその作用を遂行するのをやめてしまった途端に消えてしまうのに対し、意味志向作用によって与えられる意味としての命題は、再び別の場所、別の主観によって全く同じ命題として思念されうるという問題である。命

56. Cf. Frege (1918)

57. モルトマン達は同定の任意性問題のために命題の構造を志向性によって説明しようとしているが、この問題を提起したムーア自身は命題が他の形式的対象へと還元不可能なプリミティブな存在者であると考えている。これはフッサールの見解に近い。というのもフッサールは志向性を持ち出すが、命題の構造を心的作用に還元しないからである。つまりムーアの議論を受け入れた上でフッサールのような立場も取ることが可能である。したがってプリミティブな存在者としての命題の構造化にも志向性が必要であることをモルトマン達は論じる必要がある。唯一ジュビアンがこの点について少し触れているが、決定的な議論であるとは言えない。この点を未決のままにしても本論で提起している意味の共有可能性を論じることはできるので、また別の機会に論じたい。Cf. Jubien (2001), p. 53.

題を心的な作用から独立した存在であるとする限り、フッサールは意味としての命題と意味志向作用を同一視することはできない。そこでフッサールはスペチエスとしての命題が作用に例化されていると考えるのである (XIX/1, 105-6)。これがいわゆる命題のスペチエス説である。

命題のスペチエス説は、ソームズやハンクスの理論と細部においては相違があるものの、命題と心的作用の関係をタイプとトークンの関係として捉える点では類似している。このような理論に対してモルトマンは、真理の担い手としては心的作用のタイプよりも、態度的対象のほうが適していると考えていたが、もう一つモルトマンの説の方が優れている点がある。例えば、ソームズの理論では命題について述べるためには、ある種の反省作用によって認知的プロセスそのものを我々の思考の対象にするという複雑な手続きを行わなければならない⁵⁸。フッサールの場合も命題を認識するためには複雑な抽象化というプロセスを経る必要があるという点では同じである。しかし、我々はこのような複雑な認知的手続きを経て命題を認識し、それについて語っているとは考え難い。その点、モルトマンの態度的対象は心的作用が生じると同時に作り出される個別者であり、それ把握するために抽象化という手続きを踏む必要はない。つまり、意味の認知可能性という点ではモルトマンの理論の方が単純なのである。

フッサールも『意味論講義』(以下、『意味論』)ではモルトマンとほぼ同様の立場になり、『論研』での理論を批判して、我々の思念が向かっているものは抽象化を必要としない対象的なものであると考えるようになる⁵⁹。この対象的なものの把握に関してフッサールは次のように述べる。

その際に、もちろん我々は、作用から何らかのモメントをスペチエス的に把握する、イデア化する抽象に関わっているのではない。我々はいかなる反省も遂行していないし、それゆえ、同様のあるいは類似した洞察方法を前提とするイデアチオンも遂行していない。(XXVI, 36)

それでは、抽象化をすることなく我々の思念が向かっている対象的なものとは何なのであろうか。『意味論』においてフッサールは意味という概念を、「現出論的 phänologisch」意味と「現象学的 phänomenologisch」意味の二つに区別している (XXVI, 38)。前者の現出論的意味とは、先ほど述べた『論研』の意味志向作用の持つ意味のことで、後者の現象学的意味は作用によって構成された意味で、トワルドフスキーの

58. Cf. Soames (2010), p. 105.

59. より正確に言うと、本文のように命題のスペチエス説が放棄される背景には、真理を命題の把握としてではなく、事実の把握として説明したいという、フッサールの考えがある。この点に関するより詳しい議論は、植村 (2007) を参照せよ。

心的形成物やモルトマンの態度的対象に相当する⁶⁰。抽象化をすることなく我々の思念が向かっている対象的なものとは、この現象学的意味である。そして、フッサールは現象学的意味と命題をほぼ同一視する。その結果、命題はモルトマンの態度的対象と同様に時間的位置を与えられることになる⁶¹。だが、この変更に伴って、誰にとっても共有可能な時間上には存在しない意味というものがフッサールの存在論の中では消えてしまうように思われる。しかし、論理学の客観性を基礎付けようとするフッサールにとって、誰にとっても客観的に同一の命題は絶対に必要である。そこでフッサールは、イデアチオンあるいは本質直観という抽象化の作用によって、各々の命題に共通する同一の本質を取り出すことができると考える (XXVI, 104-5)⁶²。

いま見てきたように『意味論』のフッサールは、命題を志向的作用に例化される普遍者として捉えるのではなく、志向的作用に相関し、主体に直接的に与えられるものとして捉えるようになっていく。このようなフッサールの変化は、モルトマンがソームズとハンクスを批判して、志向的作用に相関する態度的対象を着想するに至った経緯と平行的に捉えることができる。両者の議論はともに、いわゆる「意味」と言われているものを我々の認識から独立した抽象的存在者ではなく、我々の認識に相関する具体的な存在者として捉えようとしている。しかし、それにもかかわらず両者は我々の認識から独立した抽象的存在者としての「意味」的な存在者も必要としているのである。だが、フッサールが命題の本質を必要とする動機と、モルトマンが態度的対象の種を必要とする動機は根本において異なっている。モルトマンが態度的対象の種を必要とするのは、それによって異なる主体が同じ意味を共有できることを説明するためであった。他方、フッサールは論理学の客観性を保証するという『論研』と同じ動機のもとで命題の本質を存在者として必要としているのである。このような両者の動機の相違は、フッサールが物理的な言語表現による命題の伝達について語るときに明白になる。

60. もちろん、ここでは意味志向作用のうちで、信じるや疑うなどの様相を担う志向的性質と、意味内容そのものを担う志向的質料を区別しなければならないが、話を簡単にするため本文では区別を行わない。

61. 誤解がないように強調しておくが、フッサールにとって心的なものは時間的位置を持つが、空間的位置は持たない。

62. 一方で、我々の志向作用に直接与えられる現象学的意味を事態、現象学的意味を理念化したものを命題と呼んでいる箇所もあり、フッサールが現象学的意味の存在論的位置づけに苦労しているのが伺える (XXVI, 150-153)。後に『イデー I』ではこの現象学的意味はノエマと呼ばれることになる。

3.3 命題と伝達

命題の伝達を論じるために、一度『意味論』から『論研』へと戻ろう。フッサールの伝達の議論も、物理的な言語記号に着目する点ではトワルドフスキーと同様である。例えば、会話において話者と聞き手の意思疎通を可能にしているのは、音声という物理的記号である⁶³。物理的な言語表現は、話者の思考やそれに付随する心的体験を表す機能、すなわち「告知 Kundgabe」の機能を持っており、逆に聞き手は彼を自分に話しかけている人物として把握し、告知の知覚すなわち「聴取 Kundnahme」をする (XIX/1, 40)。このような告知と聴取やり取りの中で、互いに意思疎通が可能となっている。ただし、聴取は単なる告知の知覚に過ぎず、相手の心的体験をありのままに直観するわけではない。フッサールによれば、話者と聞き手の「相互理解は告知と聴取の中で展開される心的作用の何らかの相関関係を要求してはいるが、しかし両者の完全な相当性は要求していない」(XIX/1, 41) ののである。さて、ここからはフッサールが意思疎通の場面においては同一の命題の共有を要請しているようには見えない。それはなぜだろうか。理由は言語表現が客観的でない場合があるからだ。単純な例で言えば、「私」という人称代名詞や「ここ」といった指示代名詞を含む場合、あるいは多義的な語を含む場合には、その表現の意味は発話する人物やその状況などによって変化してしまう。フッサールはこのように偶然的な状況によって意味の変わる表現を一括して「主観的な表現」と呼び、数学や論理学などの命題を一義的に表わす「客観的な表現」と対置させる (XIX/1, 85–92)。イデア的な意味統一としての命題すなわち真理を一義的に言表するためには、それに対応する精密な意味を持った表現が十分な数だけ用意されている必要があり、さらにそれら表現を形成する能力を主観が備えている必要がある (XIX/1, 95–6, XVIII, 150–1)。つまり、誰にとっても同一の命題を一義的に言表できるのは、数学や論理学などの客観的表現の形成に長けた者だけなのである。一方でフッサールは、どの主観的な表現も可能的には客観的表現に置換可能なので、その場合にはイデア的な意味統一としての命題を表現できるとも述べているが、そのすぐ後でこのような置換が事実上は遂行不可能であることを認めている (XIX/1, 95)。つまり、ごく一部の客観的表現を例外として、ほとんどの表現は主観的表現であるのでイデア的統一としての命題を一義的に表現することができない。よって、そのような主観的表現ではそもそも話者と聞き手のあいだでの同一の命題の共有など不可能なのである。そのため、フッサールは一般的な会話内容の伝達では、単なる話者と聞き手の心的作用の何らかの相関関係だけで十分であると考えてるのである。

以上から明らかのように、フッサールは、論理学などの客観的な学問が成立するた

63. 表言の伝達の区分については鈴木 (2014) が参考になった。

めの条件としてのみ、主体どうしの命題の共有可能性を必要としており、それ以外の場面での会話や記述においては告知による心的体験の伝達以上のことは要求していない。したがって、命題のスペチエス説も、客観的な学を遂行する者たちが互いに同じ表現で同じ命題を理解できることを説明するために要請された理論として理解されなければならない。

4. 命題の共有可能性と伝達可能性の区別

フッサールの議論を通してモルトマンの理論のどこに問題があるのかを明らかにするため、まずはこれまでの議論を振り返っておこう。モルトマンは、抽象的存在者としての命題が命題的態度の分析では限定的な役割しか果たせないこと、また命題をその他の抽象的存在者に還元して捉えることにも問題があることを明らかにしてきた。その結果、我々が命題と名づけてきたものの多くが、志向的作用によって形成された態度的対象とみなされることになった。これによってモルトマンは命題という抽象的存在者を想定せずに日常言語を分析することが可能になった。しかし今度は、態度的対象の共有可能性を説明するために態度的対象の種という特殊な存在者が想定されることになった。そして、モルトマンはこの態度的対象の種を想定したがゆえに、トワルドフスキーを経由する形でフッサールの命題のスペチエス説という発想をある意味で引き継いでしまっているのである。

このフッサールの命題概念の受容の系譜における誤解は、まずトワルドフスキーに生じている。2節で見てきたように、トワルドフスキーは、フッサールと同様に命題の心的作用への例化と命題の物理的表現による伝達の区別を行っている。しかし、トワルドフスキーはそもそも言語が伝達可能であるためには聞き手と話者の心的形成物が共通要素を持っていないと考える、この点でフッサールと意見を異にする。このようにトワルドフスキーが考えるのは、伝達の機能を果たす表現は一義的な意味を持つ表現でなければならない、あるいは少なくとも一義的になりうる表現でなければならないと考えているからである⁶⁴。つまり、一義的な意味を相手の心に生じさせない表現は伝達の機能を果たしているとはみなされないのである。フッサールと異なり、トワルドフスキーはこのような要請を学問における客観的表現だけでなく言語表現一般に要求してしまっているのである。前節でのフッサールの議論を考慮するならば、トワルドフスキーの要求はあまりに強すぎるだろう。

そしてモルトマンは、このトワルドフスキーの心的形成物の共通要素に絡まっている誤解を態度的対象の種という概念の中にそのまま引き継いでしまっているの

64. Cf. Twardowski (1996), p. 177.

ある。モルトマンは態度的対象の種によって、主体間における同一の意味の共有可能性を示そうとしているが、そもそも主体の間で同一の意味が共有されなければならないという素朴な発想が生じるのは、論理的心理主義への批判という文脈で生じた要請が自然言語一般に不用意に適用されてしまっているからに過ぎない。これは、命題の共有可能性ということで二つの事柄を区別することで理解しやすくなる。

前節でのフッサールの議論を踏まえると、一般的に命題的对象の共有可能性は、(i) 「タイプとして同一の命題的对象が異なった主体の信念として例化されうること」と、(ii) 「主体間での命題的对象の伝達可能性」に区別することができる。すると、モルトマンは態度的対象の共有可能性ということで (ii) よりも (i) 「例化可能性」を重視していたことが分かる。だが、(i) は論理的心理主義を批判し、フッサールのように命題に関するプラトニズムを支持する論者にとって必要とされた議論である。モルトマンが、態度的対象の類似性によって共有の説明ができることを認めつつも、態度的対象の種による説明のほうを重視するのは、最も一般的な態度的対象の種としての命題の存在を認めるためであった。しかし、命題という概念が論理的心理主義への批判という特殊な文脈で必要とされたことを考慮すれば、モルトマンのように (i) を優先させる必然性はないだろう。

他方でフッサールは命題の共有可能性ということで (i) とともに (ii) も考慮している。しかも前節でのフッサールの議論に従うならば (ii) はさらに強い意味と弱い意味で二つに分けることができる。強い意味での (ii) とは、客観的な表現によって表せられる論理学や数学の命題の伝達可能性である。フッサールは強い意味での (ii) が成立するための条件として、(ii-1) 「命題を一義的に表すことのできる客観的表現が存在すること」と (ii-2) 「その客観的表現を形成できる能力を主観が備えていること」の二つを想定していた。そして強い意味での (ii) は話者と聞き手、あるいは書き手と読み手の双方が (ii-1) と (ii-2) の条件を満たしている場合に成立する。他方で弱い意味での (ii) とは主観的な表現による伝達可能性である。この場合には、(ii-3) 「主体が互いに類似した心的体験を持ちうる」⁶⁵だけで十分である。これらの区別をモルトマンの理論に重ね合わせると、種の例化による態度的対象の共有可能性の説明は強い意味での (ii) に対応し、類似性による説明は弱い意味での (ii) に対応する。強い意味での (ii) は (i) と対になっており、論理的心理主義を批判し、論理学の客観性を保証するための議論であり、自然言語で数学や論理学の命題が伝達できることを説明する場合に問題となる。それゆえ、モルトマンのように日常的な場面での自然言語の存在論ないしは意味論を与えようとするならば、態度的対象が弱い

65. より正確に言うならば、「主体が互いに類似した心的体験を持ちうる」ことを可能にするような「主観的表現が存在すること」、「その主観的表現を形成できる能力を主観が備えていること」の二つの条件が話者と聞き手の双方で成立する場合である。

意味での (ii) をいかにして満たすのかを考慮する必要があるだろう⁶⁶。誤解のないように付け加えておくと、(i) と (ii)、また強い意味での (ii) と (ii) は互いに相反する議論ではなく、問題となっている自然言語がどのような文脈で分析されているかによって区別されているだけで、場合によっては補完しあうこともあるだろう。また、自然言語が日常的な場面だけでなく学問や芸術、文化など様々な文脈で使用されていることを考慮すると、本稿よりもきめ細かく論じ分けなければならないだろう。

以上で見てきたように、モルトマンとフッサールの議論を対比させたことによって、命題の共有可能性ということで、我々が素朴に捉えていたことが幾分か判明に捉えられるようになった。このようにフッサールの議論は現代形而上学の問題を反省的に考察するうえで十分に役立つように思われる。今後もフッサールの議論を参照することによって現代形而上学だけでなく現代哲学一般に有益な観点が与えられ、逆に現代哲学との対決を通して現象学が発展していくことを願って稿を閉じたい。

フッサールの文献

(XVIII) *Logische Untersuchungen. Erster Band: Prolegomena zur reinen Logik*, Hölzl, E. (Ed.), Martinus Nijhoff, Den Haag, 1975.

(XIX/1) *Logische Untersuchungen. Zweiter Band, Erster Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, Panzer, U. (Ed.), Martinus Nijhoff, The Hague/Boston/Lancaster, 1984.

(XXVI) *Vorlesungen über Bedeutungslehre: Sommersemester 1908*. Panzer, U. (Ed.), The Hague, Netherlands: Martinus Nijhoff, Dordrecht/Boston/Lancaster, 1987.

参考文献

- [1] JI Brandl. “Kazimierz twardowski über funktionen und gebilde: Einleitung zu einem text aus dem nachlass”. *Conceptus*, Vol. 29, No. 75, pp. 145–156, 1996.
- [2] Thomas Hofweber. “Ambitious, yet Modest, Metaphysics”, *Metametaphysics: New Essays on the Foundations of Ontology*, Chalmers, D. J. (Eds.), Oxford University Press, pp. 260–289, 2009.
- [3] Gottlob Frege. “Der Gedanke - eine logische Untersuchungen”, *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*, 2, pp. 58–77, 1918–9.
- [4] Richard Gaskin. *The Unity of the Proposition*, Oxford University Press, 2008.
- [5] Nicholas Griffin. “Russell’s multiple relation theory of judgment”. *Philosophical Studies*, Vol. 47, No. 2, pp. 213–247, 1985.
- [6] Peter W. Hanks. “Recent work on propositions”. *Philosophy Compass*, Vol. 4, No. 3, pp. 469–486,

66. (ii) の議論はフッサールにとっては認識論の問題である。モルトマンも自然言語の分析に志向性を用いるならば、態度的対象の存在論だけでなく認識論の領域にも踏み込まなければならないであろう。

- 2009.
- [7] Peter W. Hanks. “Structured propositions as types”. *Mind*, Vol. 120, No. 477, pp. 11–52, 2011.
- [8] Hanna, R. “Husserl’s Argument against Logical Psychologism”. In V. Meyer (ed.), *Edmund Husserl. Logische Untersuchungen*, Akademie Verlag, PP. 27–42, 2008.
- [9] Michael Jubien. “Propositions and the objects of thought”. *Philosophical Studies*, Vol. 104, No. 1, pp. 47–62, 2001.
- [10] Jeffrey C. King. “Designating propositions”. *Philosophical Review*, Vol. 111, No. 3, pp. 341–371, 2002.
- [11] Jeffrey C. King. *The Nature and Structure of Content*. Oxford University Press, 2007.
- [12] Friederike Moltmann. “Propositional attitudes without propositions”. *Synthese*, Vol. 135, No. 1, pp. 77–118, 2003a.
- [13] Friederike Moltmann. “Nominalizing quantifiers”. *Journal of Philosophical Logic*, Vol. 32, No. 5, pp. 445–481, 2003b.
- [14] Friederike Moltmann. “Attitudinal objects”. unpublished, 2009.
- [15] Moltmann, F. *Abstract Objects and the Semantics of Natural Language*. Oxford University Press, 2013.
- [16] Friederike Moltmann. “Propositions, attitudinal objects, and the distinction between actions and products”. *Canadian Journal of Philosophy, Supplementary Volume on Propositions*, Vol. 43, No. 5–6, pp. 679–701, 2014.
- [17] Joseph G. Moore, “Propositions, Numbers, and the Problem of Arbitrary Identification”, *Synthese*, Springer Netherlands, Vol. 120(2), 229–263, 1999.
- [18] Agustin Rayo and Stephen Yablo. “Nominalism through de-nominalization”. *Noûs*, Vol. 35, No. 1, pp. 74–92, 2001.
- [19] Tobias Rosefeldt. “‘that’-clauses and non-nominal quantification”. *Philosophical Studies*, Vol. 137, No. 3, pp. 301–333, 2008.
- [20] Bertrand Russell. “On the nature of truth”. *Proceedings of the Aristotelian Society*, Vol. 7, No. 1, pp. 28–49, 1906–1907.
- [21] Scott Soames. *What Is Meaning? (Soochow University Lectures in Philosophy)*. Princeton Univ Pr, 2010.
- [22] K. Twardowski. “Funktionen und gebilde”. *Conceptus*, Vol. 29, No. 75, pp. 157–189, 1996.
- [23] 植村玄輝. 「実的なものの現象学の限界：命題のスペチエス説はなぜ放棄されたのか」. 『フッサール研究』, 第四・五号, pp. 170–180, 2007.
- [24] 鈴木崇志. 「告知と身体表現」. 『現象学年報』, Vol. 30, pp. 117–124, 2014.